

～ 聖徳太子十七条憲法制定 1400 年記念 ～

御法話と大道芸・落語で楽しむ・天王寺蕪・釣鐘饅頭付

極楽浄土の庭観桜会

御法話：「大悲息むことなし」

瀧藤尊教第 105 世官長

落語：「天王寺詣り」

六代目 笑福亭松喬

落語ワークショップ：

解説 笑福亭三喬 ・ 三味線 林家和女

太鼓 笑福亭生喬 ・ 笛 笑福亭喬若

大道芸：解説 旭堂小南陵

のぞきからくり：旭堂小二三 ・ 旭堂南陽

会場：四天王寺 本坊 客殿

聖徳太子様も見上げた夜空

真夏の夜、四天王寺の五重の塔の前に居た。建物が乱立する大阪の街中にいるというのに、ここはまったく別世界だ。風が四方から舞い込んできて、汗ばむ体を快く包み込んだかと思うと、纏わり付く湿気のベールを剥ぎ取って何方かへと舞い去っていく。耳にはこれまた古の仏教音楽、雅楽の音色。強烈な個性を羽織った出で立ちで舞が奉納される。天王寺雅楽の華麗なる舞楽と共に、五重の塔や回廊がライトアップされている。

春日大社の南都楽所の笠置楽頭から「帰り道にお立ち寄りください」と送って頂いたチケットを懐に、会社帰りに五重の塔の前に座っていた。

四方から舞い込んで来る快い風、何度も訪ね来た四天王寺なのに、雅楽の音色が広がる夜の闇の中に、見えない何者かと共に、雅楽を楽しんでいるかのような気配を感じる。五重の塔の廂の先に極彩色の長い旗と共に据え付けられている小さな梵鐘が、風が舞い踊る度に「カラカラ」と拍手をするように、又雅楽の合いの手を打つように響きを添える。やがて視線は、五重の塔の廂から、塔の頭上で高みの見物をしている星々に達していた。街中の建物が建てこんだ中で見上げる夜空とは異なる、広大な夜空が広がっていた。その夜空に突き刺さるように聳え立つ五重の塔が、何本もの旗を翻しながら真夏の夜の雅楽の音色に聞き入っているかのようなだった。

塔の先に、星が輝いていた。周囲の景色はかなりの変遷があるとしても、何れの御時には、聖徳太子様もこのあたりに御立ちになり聳え立つ塔の先に輝く星を眺められたことがあるやもしれぬ……。何処かとは限定できないが、ここは四天王寺、仏教伝来の最古の寺院として、命がけで物部氏との攻防の末に築かれた寺院である。この辺りに確かに聖徳太子様がおいでになったのだ……。

自宅近くが聖徳太子の古戦場

大阪の歴史は古い、正に歴史舞台の真っ只中で生活している。数年前に NHK で聖徳太子様がドラマ化された。そのハイライトシーン、物部守屋との戦い・渋川の戦いの場面に見入っていたが、実は自宅近くがその戦場である。近くには m 大聖勝軍寺（通称・太子堂）は元は物部守屋の別宅で、戦況不利なとき、大きな椋（むく）の幹が二つに割れて太子をかくまったという神妙椋樹が枝を伸ばし、守屋の首を洗ったといわれ”守屋池”や墓もある。間違いなくこの辺りが激戦地で、自宅辺りを聖徳太子様を先頭に多くの軍勢が右往左往したのだろうかと思いを膨らましながらドラマに見入っていた。そういえば、自宅傍の路地が、難波宮から飛鳥を結んだ奈良街道・渋川道であるとも聞いた事がある。すべて何れの御時なので、明確な場所は定かではないが、歴史舞台の辺りに住まいしているのが大阪人なのだろうが、そんな歴史にトンと興味がないのも大阪人。そんな大阪人に頭を下げて、聖徳太子様建立の日本最古の四天王寺！！などと十年間も大阪の歴史講座を次々と企画し、宣伝してる大阪人の自分の姿が滑稽で奇妙で仕方がないときがある。

四天王寺・客殿を会場にの企画浮上

熟塾の講座に年間計画などというものは無い。なんせ、自転車操業なので、誰と袖摺りあうのかが講座に結びついている。実に流されるまま、なんとも心もとないのは私の人生そのまま、今回の四天王寺の極楽浄土の庭に辿り着いたのも、風任せ。

自転車操業というものの、流石に昨年 10 月の中央公会堂を借りての十周年記念イベントは大掛かり。一年前に会場を押さえたものの、企画をグルグルと練り直したりで、どうも羅針盤が右に左に大きく振れてここぞという企画に盛り上がらない。自問自答、焦りながらの企画も、旗揚げの志を立てた適塾界限。船場や大阪の夢をテーマにとやっと盛り上がったところで、ドタバタと企画を盛り付け、船場の数え歌「おんごく」の再現まで思いついた。今もそうだが、なんせ、働きながらの活動で睡眠を削ったの活動となる。

そんななか、四天王寺さんを借りれるかもの話が浮上。天下の四天王寺さんを熟塾なんぞが借りれるの?? いつぞや聖徳太子様と縁の深い河内十五寺を巡るバスツアーに同行したときがあって、四天王寺さんも勿論入っていたが、ツアーを企画した会の人々が事前に根回ししていなかったのが、突然来られても事務局の人とのやりとりを本坊の門前で遠まわしに聞いただけ。中には入れなかった。四天王寺さんだものねと、改めてその大きさを実感していた。実は、お借りできないものかと問い合わせをしたものの。どうも敷居が高くそのままになっていた。一昨年、熟塾の企画で、遊女夕霧のお墓参りに行ったときも、四天王寺の本坊を外から眺め、工事中の極楽浄土の庭を巡っただけだった。

「本当に、四天王寺の本坊・客殿をお借りすることができるの??」その四天王寺さんを借りれるの?。天王

寺蕪の研究をしている村上無芳さんが元官長さんと懇意なのでということ、更に山本ゆきさんが四天王寺さんが舞台なら「天王寺詣り」が十八番の笑福亭笑喬さんの落語を聴こうということで盛り上がった。辿り着くべくして、辿り着いたように、回りまわったご縁で、四天王寺の本坊の尾門が開いた。それも、極楽浄土の庭の桜も花を添えてだ。

亡母を偲ぶお花見企画

お花見は熟塾にとっては年間の一大イベントだ。10年前、西行法師の花の寺にバスツアーを出した。今も昔も貧しかったので、弟に菓子を買いに走らせ、座敷に袋を広げて、母におやつセットの袋詰めを手伝わした。その年の桜は天候にも開花時期にも恵まれ春爛漫、花見日和になった。母は袋詰めしながら、「人数足らなかつたら、私も行こうかなあ」と呟いていた。バスも満員になり、絶好の花見を楽しんだが、その年の夏、母は61歳で急死した。その春が母にとって最後の花見になったのなら、一緒に連れて行けばよかった。あの満開の桜と一緒に楽しんだらよかったのに、母にお菓子の袋詰めを手伝わせただけで桜と一緒に愛でることができなかったのが、大きな心残りとなっている。だから、お花見はそんな母への思いと重なって、私にとっては大切な行事となっている。桜が咲く度に、母に見せられなかったことが無念で、母と一緒に見ることをできないことを悲しく思い出される。だから、熟塾で組んだお花見の企画では、母に見ることができなかった桜と一緒に見ていただくことがこの上なく嬉しい。そして、昨年も、今年も塾生の最高齢、83歳の森川道子さんが参加いただいた。「今年も綺麗に咲きましたね・・・」と森川さんの傍で極楽浄土の見事な桜を愛でることができる一時の幸せをともしく感じることができた。

気付いたら、十七条憲法制定から1400年目

まだ残暑が厳しい八月、十周年のイベントのチケットの売れ行きが不調で、大きな重荷を担ぎながら、土曜の昼前に四天王寺さんの極楽浄土の庭にいた。山本さんが3月末でと仮押さえしていたが、お花見の企画にしようかと舵をきり、4月の第一週目の土曜日に変更していただいた。総務部の課長さんに御挨拶し、客殿や本坊内を下見させていただいた。庭の茶室で一服いただいたが、10月の十周年イベントが重石になっていて、桜までは思いを馳せる余裕がなかった。

10周年はたくさんの方々のご協力でどうにか峠を越えることができた。瞬く間に木枯らしに吹かれる季節になりながら、山本さんは早くチラシをと連呼するが、この寒空にお花見をと誘っても春尚通しの気配にチケットは売れないでしょう・・・と言っている間に、2月に天神さんにいき、3月に青木さんちを訪ねて丹波で牡丹鍋を食べ終わると、流石に桜の蕾が膨らみ始めた。チラシを配り、またまた歴史に興味のない大阪人に「四天王寺さんでのお花見はいかが？」の連呼。山本さんが松喬さ

んのファンクラブ宛にチラシを送る。その頃になって、過労気味の我が家のパソコンの調子が悪くなり、チラシの印刷がままならない。印刷できた分からは、自宅で発送することになる。深夜に帰宅してから、ストーブの炎にウツラウツラ、気がつくとも寒さが一時厳しくなる明け方の空気に揺すり起こされる。幾晩か、パソコンとの添い寝が続き、締め切った襖に囲まれた座敷で正に冬籠りしている穴熊状態。夜なべ仕事に一人精を出していると、時々北風がひどく窓ガラスを叩きにやってくる。

何度かにわけて500通程送ったが、申込はポツポツ、「捨てる神あれば、拾う神あり」で入金通知が着くたびにほっと一息つき、申し込みがない日には、会場となる本坊の客殿が広々と目に浮かんだ。入金通知がくる度に、申込者の名簿を表に打ち上げ、会計入場券発送係りの北村さんにファックスで申込者を連絡する。地道な発送作業の合間に、会場の最終の打ち合わせの為、北原さんと小南陵師匠と村上さんとで春のお彼岸で人が溢れる四天王寺さんに何う。毎日新聞の山手記者から掲載予定の連絡有り。ちょうど一週間前の日曜日にこのイベントが紹介され、50名ほどの申込があり、定員の200名に近づいた。更に、偶然だが、天王寺ステーションのチラシを見ると、お彼岸ですの次に四天王寺の五智光院の写真と「4月3日は、聖徳太子が十七条憲法を制定されてから1400年」という文字を目にする。4月3日、何かあったかなあ・・・そうだ、私たちのお花見の日！　ちょうど、1400年目！！。四天王寺さんで何か行事でも重なっていたのかと電話で確認すると、一年間にわたる十七条憲法にまつわる講義があるものの、当日は特にないとのこと。友人に「十七条憲法制定の日に四天王寺さんの本坊をお借りするなんて、厚かましいね」と言うと「それって、厚かましいというよりも恐れ多いっていうんじゃないの・・・」の返事に思わず頷いた。

当日は晴天也

開催一週間前に、受付を手伝ってくれた鍛冶さんや森川さんや平野さんらと事前の打ち合わせで集まった時「天気予報は雨、傘マークやねえ」の声に、私はちょっと胸をはって「大丈夫！。私は晴れ女なので、傘要らず。きっと晴れますよ。」と声を上げた。内心ちょっとした不安があったが、雨は降らないという晴れ女の予感が先行した。

果たして、当日は晴天だった。

五重の塔の先に輝く星を聖徳太子様もこの地よりご覧になったろうかと思いを馳せていた地で、十七条憲法を制定した日に、本坊をお借りし、前官長のお話を拝聴し、昨年整備され今年初めて咲く桜を愛でることができる。100年前の日本人がこんな日本になっていたと創造していただろうか。1500年目、100年後、日本はどんな姿だろう。「十七条制定1400年目に四天王寺さんにお参りしてきたとしても、1500年目には居ないだろうから」とメンバーの誰かが「いや、原田さんなら居るねえ」というので、「そうね、1500年目の4月3日には五重の塔

の先で風と一緒にクルクル回りながら、お花見をするの！」とちょっと真剣な顔つきで返事したものの・・・人の命などは風前の灯火、風前の桜花なのは、あっけない母の急死で痛感している。要は、人生は『空(くう)』なのだ。どんなに欲ばったところで、何も持たずに生まれてきたように、何もあの世に持たずに去っていくのみ。何も持っていけないが、少しばかりの思い出だけがその人の糧となるのだろう。それとても、形がなく、ただの有り難い「空」なのだ。急死した母の遺骨を前にしたとき、それは我遺骨になり、生きながらにしてわが正体を見てしまったからは、その思いに達した。

果たして当日は日本晴れ、桜も開花が進み、満開。四天王寺の客殿の前の桜も満開で、極楽浄土の庭の桜も見事なまでに春を寿いでいる。朝十時に四天王寺の客殿に集合。旭堂小南陵先生のお弟子さんの小二三さんに南陽さんが大きな箱を前に既に到着。「天王寺詣り」に出てくる「のぞきからくり」再現をとということで、お願いした。この晴天なら、野外でということで、さっそく組み立てがはじまる。地獄極楽の様子が覗いた穴の奥でパタパタと移り変わる。リハーサルに散策中の子供ずれの家族を呼びとめる。テレビや映画など、動くものには目新しさはないが、それでも立体紙芝居なる覗きからくりは江戸時代の庶民の楽しみだったに違いない。いかにも説法的で、また覗き見る楽しさもある。今回の覗きからくりはミニチュア版だが、本物はかなり大きいとのこと、大画面の迫力とその節回しに、どこか懐かしいノスタルジアを感じることができる。

極楽浄土の庭に咲く桜の輝き

会場へ足を踏み入れる。打ち合わせとおり、落語用の高座に、演台、まわりには家紋の入った布が張り巡らされていた。そして、庭に目をやると、朝日に桜が輝いている。今を盛りに咲き競っているのは正に極楽浄土、庭側に袖を伸ばしていた囲いを解くと更に客殿の前に広がる桜をこよなく鑑賞することができる。この極楽浄土はお経の一説に、欲に心奪われている間は見えない道がある。すべての欲を捨てた時、眼前に広がる極楽浄土へつづく「白道」を具現化した庭園でもある。快い風と陽ざしに誘われて、思わず窓を開ける。桜の花びらが、少しばかりの風に舞込んでくるかのように、溢れんばかりの桜の輝きに感嘆。座布団を並べ、受付の準備をしている間に昼近く、塾生の林さんが広島友人を3名連れてお弁当を買ってやってきてくれた。更にわらび座の劇団員も、すっかり案内係りに動員されていた。お約束の天王寺蕪のお漬物と、釣鐘饅頭も到着。受付が始まると、客殿の間は、ほぼ満席の二百名足らず。

1400年目に四天王寺で十七条憲法を讀上げる

定刻、挨拶もそこそこに、本日は十七条憲法制定からちょうど1400年目。四天王寺様から十七条憲法の小冊子も頂戴しましたので、定刻にお出ましいただいた瀧堂元官長を前に、「読み上げます！」と私は一気に憲法を読み

上げた。十七条憲法は学校で習ったが、「和を以て尊しと為す」だけで、全文に目を通す機会がなかった。小冊子はいただいたが、帰ってから読んでくださいといわれても、忙しさにかまけてそのまま引き出しの中に入れておいた。制定されて今日は1400年目なのだから、一気に読み上げようと、声に出して読み上げると非常に語呂が良く、リズム感があり、耳障りが良い。文章の流れもだが、その内容が目から鱗。皆で仲良くしましようという内容だけだと思っていたら、実は役人の心得が列記されていた。賄賂は受け取るな、懲罰は明白に、無駄な税は徴収するな、朝早く来て遅くまで民の為に働け、仕事の引継ぎは無駄なくなどと規則を列記するばかりか、上の者に礼がないと、下の者は大きな罪を犯す、など心得も列記。ある意味、聖徳太子様の人生哲学を凝縮したエキスイミたいな文章でもある。昨今の自らの年金未納は棚に置き、名誉やお金のために奔走する政治家や役人の道德感のなさに呆然するばかりの「上」の乱れが、親が子を、小学生の子供までが友人を学校で処刑に近い形で抹殺するという「下」の事件が起こる今の現状を察してかのような内容。十七条憲法では、民の痛みを我がものとして、誠を以て話し合えば解決できないことはない、小さなことはともなく、政治上大きなことで間違いがあってはならない。お互いに凡夫なのだからよく話し合おうと、驕り高ぶらず自分を凡夫といいきる聖徳太子という方の度量の広大さを感じずにはいられない。1400年目の私たちに届くということは、十七条憲法がその時々様々な課題を抱えながら生きてきた人々の思いをも、今に伝えているのかもしれない。どの時代にも役人の賄賂がまかり通り、貧富の差はあり重税に庶民の人々は苦しんだが、腐った行政組織に反旗を翻す輩も多く、その現状を憂える人がきっと古に聖徳太子様が十七条憲法を制定されたのだと事あることに引用し、ある政治家は座右の銘として掲げた人もあるだろう。1400年伝えられた言葉は、真実なのかもしれない。そして、十七条憲法の精神が人々から消えたとき、日本が危ない。

聖徳太子奉讃

やまと ひじりまし かみつみのとよと みのみ こ まお
日本の國に聖人有ます、上宮豊聡耳皇子と曰す。
まこと あめ ゆるざれ はるか ひじり いきほひ
固に天に悠縦たり。玄なる聖の徳を以て、
やまと あ きみのみち つつ ぬ さきのひじり
日本の國に生まれませり。三統を苞み貫きて、先聖
のおほきなる宏猷を纂ぎ、三寶を恭み敬いて、
おほむたから たしなみ すく これ まこと おほきひじり
黎元の厄を教ひたまふ。是れ實の大聖なり。

『日本書紀』

憲法十七條 聖徳太子肇親作

一に曰く、和を以て貴しと為し、
忤うること無きを宗と為よ。

ひとみなたむらあまたさとものすくここを以てあるいくんぶしたが
人皆黨有り。亦達れる者少し。是を以て、或は君父に順
わず、乍隣里に達ふ。然れども上和らぎ、下睡びて、事を
論ずるに諧わば、則ち事理自ら通ず、何事か成らざらん。

仲よくすることが大切である。上の者と下の者が
仲良く話し合えば、成就しないことはない。

二に曰く、篤く三寶を敬え。

三寶とは佛・法・僧なり。則ち四生の終歸にして、萬國
の極宗なり。何れの世、何れの人か、是の法を貴ば
ざるべき。人尤だ悪しきは鮮し。能く教うれば従う。
其れ三寶に歸せずんば、何を以てか枉れるを直せん。

仏と法と僧を敬え。この三つの宝によらなければ、
まがった人間をただすことはできない。

三に曰く、詔を承りては必ず謹め。

君は即ち天たり、臣は則ち地たり。天覆い、地載せ、四時
順行して、萬氣通ずる事を得。地、天を覆わんと欲ば、
則ち壞れを致さんのみ。是を以て、君言えは、臣承
り、上行えは下靡く。故に、詔を承りては必ず謹
め。謹まざれば自らに敗れん。

天皇の命令には必ず従え。天皇は天であり、臣民は
地である。

四に曰く、群卿百寮、禮を以て本と為よ。

其れ民を治むる本は要ず禮に在り。上、禮なきときは下
斉わず。下、禮無ければ必ず罪有り。是を以て、郡臣禮
有れば、位次乱れず。百姓禮有れば國家自ら治まる。

役人は礼儀正しくあれ。上の者に礼がなければ治ま
らないし、下の者に礼がなければ、きっと罰せざるを
えないような罪を犯すことになる。

五に曰く、餐を絶ち欲を棄てて、
明かに訴訟を辨めよ。

其れ百姓の訴、一日に千事あり。一日すら尚然り。況
んや歳を累ぬるをや。頃訟を治むべき者、利を得るを
常と為し、賄を見て訴を聴く。便ち財有るもの訟
は、石を水に投るが如く、乏しき者の訴は、水を石に投
ぐるに似たり。是を以て貧民は、則ち由る所を知ら
ず、臣の道亦焉に闕く。

役人は私利私欲を捨てよ。人民の願いごとを明白
に裁かなければならない

六に曰く、悪を懲し善を勧むるは、

いにしえりょうてん
古の良典なり。

是を以て人の善を匿すこと無く、悪を見ては必ず匿せ。其
れ諂い詐る者は、則ち國家を覆すの利器なり。人民
を絶(た)つ鋒劍為り。亦佞と媚ぶる者は、上に対して
は、則ち好んで下の過を説き、下に逢いては、則ち上
の失を誹謗る。其れ此の如き人は、皆君に忠なく、民
に仁無なることし。是れ大乱の本なり。

役人は私利私欲を捨てよ。人民の願いごとを明白
に裁かなければならない

七に曰く、人各々任有り、
掌ること宜しく濫りならざるべし。

其れ賢哲官に任ずれば、頌音則ち起り、奸者官を有つ
ときは、禍乱則ち繁し。世に生れながらに知るもの少し。
尅(よ)く念いて聖と作る。事大小と無く、人を得れ
ば必ずま治、まり、時急緩と無く、賢に遇えば自ら寛
なり。此れに因つ國家永久にして、社稷危きこと勿し。
故に古への聖王は官の為に人を求めて、人の為に官を
求めず。

人にはそれぞれにつとめがある。自分の責任の範囲
を守るべし。

八に曰く、群卿百寮、早く朝りて晏く退れよ。

公事は監ま靡し。終日にもても尽し難し。是を以て、遅く
朝れば、急に速ばず、早く退れば、必ず事尽さず。

役人は、早く出勤して遅くまで働け。政務は多忙で
ある。

九に曰く、信は是れ義の本なり。事毎に信あれ。

其れ善悪成敗は、要ず信に在り。君臣共に信あらば、何事
か成らざらん。君臣信無くば萬事悉く敗れん。

何事をするにも真心をもってせよ。そうすればうまく
いかないことなどない。

十に曰く、忿を絶ち、瞋を棄て、
人の違うを怒らざれ。

人皆心有り。心各々執ること有り。彼の是は則ち我の
非にして、我の是は則ち彼の非なり。我れ必ずしも聖
に非らず。彼必ずしも愚に非らず。共に是れ凡夫のみ。是非
の理、なんぞ能く定むべき。相共に賢愚なること、鑲の
端無きが如し。是を以て彼の人は憤ると雖も、還つて我
が失を恐れよ。我独り得たりと雖も、衆に従いて同
く拳へ。

他人が自分に逆らったからといって怒るな。自分

も他人も絶対的に正しいということはない。

十一に曰く、明に功過を察して、賞罰必ず当てよ。日者、賞は功に在らず、罰は罪に在らず。事を執る群卿宜しく賞罰を明かにすべし。

下役の者に手柄があったか失敗があったかをよく見抜いて、まちがいなく賞罰を行ないなさい。

十二に曰く、国司、国造、百姓に斂ること勿れ。国に二君非し。民に尙主無し。率土の兆民は、王を以て主と為す。任ずる所の官司は、皆是れ王臣なり。何ぞ敢て公と与に、百姓に賦斂せん。

地方の役人は勝手に税を取りたててはならない。人民の主は天皇だけである。

十三に曰く、諸々の官に任ずる者は、同じく職掌を知れ。或は病み、或は使して、事を闕くこと有らん。然れども、知ることを得る日には、和すること曾て識れるが如くせよ。其れ与り聞くことに非ざるを以て公務を防ぐること勿れ。

いろいろな役目に任命された役人は、それぞれの役人の役柄や仕事を知らねばならない。病欠の穴を埋め、円滑に引き継ぎを行わなければならない。

十四に曰く、群臣百寮、嫉妬有ること勿れ。我既に人を嫉めば、人亦我を嫉む。嫉妬の患其の極りを知らず。所以に智己に勝るときは則ち悦ばず、才己れに優るときは則ち嫉み妬む。是を以て五百の後、乃今、賢に遇うとも、干載にして、一聖を待つこと難し。其れ聖賢を得ずんば、何を以てか国を治めん。

役人たちは、他人をねたむな。憎しみには果てがない。

十五に曰く、私に背きて公に向うは、是れ臣の道なり。凡そ、人に私有れば必ず恨み有り。憾有れば必ず同せず。同せざれば則ち私を以て公を妨ぐ。憾起れば則ち制に違ひ法を書う。故に初章に云わく、上下和諧せよと。其れ亦是の情なる歟。

私情を棄てて公のために尽くせ。自分本意は他人の恨みを買ひ、公務の妨げとなる

十六に曰く、民を使うに時を以てするは、古の良典なり。故に冬の月には間有り。以て民を使う可し。春より秋に至

るまでは農桑の節なり。民を使う可からず。其れ農らずんば何をか食ひ、桑せずんば何をか服ん。

人民を使役するには時節を考えなければならない。春や秋に駆り出して、農業や蚕業の妨げになってはならない。

十七に曰く、夫れ事は独り断ず可からず、必ず衆と与に宜しく論ずべし。少事は是れ軽し。必ずしも衆とすべからず。唯大事を論ずるに速びては、若し失有らんことを疑う。故に衆と共に相弁ずれば、辞則ち理を得ん。

政治上のことは独断せず、多勢と相談せよ。小さなことはともかく、大事なことにあやまちがあってはならない。(日本書紀卷二十二)

四天王寺縁起

四天王寺は今から約1400年前、推古天皇元年(593)に聖徳太子が建立された、日本仏法最初の大寺である。

新しく渡来した、仏教を支持する蘇我氏と日本古来の宗教を推す物部氏の二大豪族の狭間で、弱冠16歳の聖徳太子は仏教の守護神、四天王に祈願して戦いに勝利した。その報恩謝徳のため、建てられたのが四天王寺である。四天王寺は四箇院(敬田・悲田・施薬・療病)を構え、広く一般民衆に手をさしのべ、太子信仰の拠点となると同時に、庶民救済の中心地となった。(四天王寺ホームページより引用)

創建 推古天皇元年(593)に建立されました。今から1400年以上も前のことです。『日本書紀』の伝えるところでは、物部守屋と蘇我馬子の合戦の折り、崇仏派の蘇我氏についた聖徳太子が形勢の不利を打開するために、自ら四天王像を彫り「もし、この戦いに勝たせていただけるなら、四天王を安置する寺院を建立しましょう」と誓願され、勝利の後その誓いを果たすために、建立されました。

聖徳太子が四天王寺を建てられるにあたって、「四箇院の制」とられたことが『四天王寺縁起』に示されています。「四箇院」とは「帰依渴仰 断悪修善 速証無上 大菩提所」つまり仏法修行の道場である“敬田院”、病者に薬を施す施薬院”、病気の者を収容し、病気を癒す“療病院”、身寄りのない者や年老いた者を収容する“悲田院”の四つの施仏教の根本精神の実践の場として、四天王寺を建てられたといえるでしょう。これらの施設は、中心伽藍の北に建てられたようです。その伽藍配置は「四天王寺式伽藍配置」といわれ、南から北へ向かって中門、五重塔、金堂、講堂を一直線に並べ、それを回廊が囲む形式で、日本では最も古い建築様式の一つです。その源流は中国や朝鮮半島に見られ、6～

7世紀の大陸の様式を今日に伝える貴重な存在とされています。

平安時代 平安時代は伝教大師最澄の興した天台宗、弘法大師空海の興した真言宗の二大宗派に深く関わることになります。例えば、空海は延暦6年(787)に四天王寺に借住し、西門で西の海に沈む夕陽を拝して、西方極楽浄土を觀想する「日想觀」と呼ばれる修行をはじめました。また、承和4年(837)には、四天王寺の最初の別当に真言系の東寺の阿闍梨円行が就くなど、真言宗とのつながりが認められます。しかし、真言宗よりもさらに強いつながりを持ったのが最澄の天台宗です。

最澄は弘仁7年(816)に四天王寺に借住し、上宮廟に入り、法華宗を広めようとして詩を奉り、六時堂や椎寺薬師院を創建したと伝えます。その後も最澄の弟子光定の上宮廟への参籠、同じく円仁の四天王寺での法華経・仁王経の講義、安居講の創始などがあります。さらに四天王寺別当職も、東寺の円行以降は天台僧の補任が圧倒的に多くみられます。つまり四天王寺はかなり早い時期から天台化されたといえそうです。

この天台化による四天王寺信仰の特色としては、聖徳太子を天台大師の師匠に当る南多岳慧思禅師の生まれ変わりとして説き、法華思想を取入れると同時に、久遠釈迦如来への信仰、特に舍利信仰が盛んとなりました。また、天台浄土思想とも結びついて当寺を極楽浄土の東門の中心であるとし、現在も西門石の鳥居の扁額に記される「釈迦如来転法輪処当極楽土東門中心」の言葉が示すように四天王寺の信仰の大きな柱となりました。

このように平安初期、天台化された四天王寺ですが、寺としての基盤は創建当寺や奈良時代ほど強力とはいえませんでした。さらに、『日本紀略』によりますと、天徳4年(960)に焼亡するとあります。この時の火災は大規模だったようで、四天王寺にとっては極めて大きな打撃だったと思われます。しかし、太子信仰、舍利信仰、浄土信仰に支えられた四天王寺は、天皇家はもちろん、藤原一門らの貴族の庇護のもと再建されます。さらに、寛弘4年(1007)に金堂六重塔中より『四天王寺縁起』が発見されたこともあり、この頃から天皇、皇族の参詣が頻繁に行われるようになりました。

12世紀に入ると天皇、貴族の参詣はさらに盛んになり、藤原頼長の日記『台記』を見ると、金堂で舍利会を行い、聖霊院で絵解きを受けるなどしたことが記されます。つまり、浄土信仰・舍利信仰・太子信仰のそれぞれ行事が行われたことがわかります。殊に、西門の浄土信仰は法皇、貴族のみでなく、一般庶民に大きな広がりを見せました。この信仰は時に熱烈なものもあったようで、保延6年(1146)に僧西念が西門より西海に向かって入水往生したことなどはその例といえます。鳥羽法皇の後、後白河法皇も負けず劣らず四天王寺参詣に熱心で、そのなかでも文治3年(1187)の五智光院での授戒

灌頂、翌4年の八条女院らとの如法経供養などは大きな出来事でありました。

鎌倉時代 鎌倉時代に至っても、後白河法皇や貴族の四天王寺への参詣は跡を絶たず、さらに建久6年(1195)に、將軍頼朝が参詣したのをはじめ、武家の参詣・帰依も行われるようになりました。西門の浄土信仰もますます盛んになり、しばしば念仏停止令が出されるほどでした。そのような中、四天王寺の隆盛に努めたのは、九条兼実を兄に持つ天台山門の学問僧・慈円です。慈円は行慶別当の頃、倒壊した聖霊院の絵堂を再建し、自ら太子講式を著し、聖徳太子の徳を賞嘆しました。そして承元元年(1207)と建保元年(1213)の二度、四天王寺の別当に就任しています。しかし、慈円の四天王寺別当就任は、以後の別当職の山門化につながり、鳥羽・後白河上皇の頃に、四天王寺に勢力をふるった園城寺門徒の反発を買い、四天王寺の別当職をめぐる山門・寺門の争いが激化しました。

鎌倉時代の後期には、太子の精神に深く共鳴した律僧の叡尊や忍性が活躍しました。現在の西門の石の鳥居は、忍性によってそれまでの木の鳥居が改められたものです。また忍性は、四天王寺の四箇院のうちの悲田・敬田の二院も再興しました。

南北朝時代では、四天王寺も吉野方と幕府方の戦いに巻き込まれ、以後南北朝統一までには四天王寺周辺も、たびたび戦場と化しています。特に後醍醐天皇は四天王寺に立ち寄られたときに聖徳太子の「御手印縁起」をご覧になり、そこに書かれた太子の予見において、王道擁護の立場と仏道興隆の強い意志に深く感銘されて自ら書写し、手印二顆を押されました。これが現在残る「四天王寺縁起後醍醐天皇宸翰本」であります。また、南朝の忠臣として知られる楠木正成が、四天王寺に立ち寄った折に古老から閲覧したという太子未来記について記した「太子未来記伝義」という書も残ります。そこには、南朝の正当性や勝利の確信、王道擁護の立場が見て取れます。一方、四天王寺は足利將軍家ともつながりを持ち、元中5年(1388)には義満が“天王寺領諸国段錢以下課役免除”の御書を下したり、翌年には参詣もしたといわれます。しかし、室町時代末期の応仁の乱のときにはしばしば戦火にまみれました。寛正元年(1460)には畠山義就により放火、文明2年(1470)には大内の兵による放火などを受けています。どかれたかは不明ですが、四天王寺が大坂の中心にあることで戦いの場になったようです。

戦国時代はさらに苛酷で、織田信長の石山本願寺攻めの折には、本願寺方にも焼かれ、ほぼ壊滅状態となりました。この後すぐに伽藍再建の諸国勸進が行われ、豊臣秀吉からも寄進を受けましたが、実際に再建が実行されたのは秀吉亡きあとの慶長5年(1600)のことです。

四天王寺に残っている豊臣秀吉自筆と伝える『四天王寺造営目録』によると、伽藍と主要な堂宇が再建されたとおもわれます。また現在の舞楽装束や所用具もこの時に寄進されています。しかし、この再建伽藍も短命で、慶長19年(1614)の大坂冬の陣で大坂方の放火に遭って炎上焼失しました。その後、徳川幕府によって再建されることになり、片桐主膳正や赤井豊後守などの奉行として元和4年(1618)から6年におよぶ歳月をかけ、元和9年(1623)に完工しました。再建された四天王寺は橋守国筆の「摂津国四天王寺図」で見ることができますが、この折に建てられたり造られたもののなかで現存するものとしては、本坊方丈・五智光院・六時堂・元三大師堂といった堂宇や狩野山楽の筆になる聖霊院絵堂の板絵「聖徳太子絵伝」などがあります。江戸時代の四天王寺は幕府の保護によって再建されましたが、庶民からも特に西門を中心とした信仰の場として活気を呈していたようです。しかし、この元和再建の伽藍も、享和元年(1801)12月5日の雷火によって焼失しました。この被害は四天王寺にとっては大打撃で、今度は幕府からの援助もあまり期待できませんでした。再建するには険しい状況でしたが、庶民の寺として四天王寺再建を望んだ大坂町人は捨て置かず、錦袋町年寄の淡路屋太郎兵衛が勧進元となって町人の財を集め、文化10年(1813)に再建落成をみました。まさに庶民の寺“大坂の仏壇”として四天王寺が甦ったといえます。

明治以後の四天王寺は、まず、明治維新の神仏分離令により、それまで四天王寺に所属していた神社が離され、四天王寺境内も公園地となるなど厳しい状況に置かれていましたが、人々からは依然として庶民信仰の寺・太子の寺として深い信仰を受け、諸行事は従来どおり行われました。その後、大正から昭和にかけては、太子創設の「四箇院」の復興を期して、“敬田院”事業の継承として大正11年(1922)に天王寺高等女学校(四天王寺学園の前身)が設立、そして昭和8年(1933)には“施薬院”“療病院”を継承して四天王寺施薬療病院(四天王寺病院の前身)が設立されました。昭和9年(1934)9月21日、近畿一円を襲った室戸台風によって五重塔が倒壊、金堂は傾斜破損、仁王門(中門)も壊滅するなど、境内全域が相当な被害を被りました。

昭和15年(1940)、努力のすえに五重塔が再建されましたが、それも束の間、昭和20年(1945)の大坂大空襲により、六時堂や五智光院、本坊方丈など伽藍の北の一部の建物を残し、境内のほぼ全域が灰燼に帰してしまいました。しかしこの時も、各方面の人々の協力を得て復興への努力がなされ、昭和38年(1963)には伽藍が、昭和54年(1979)には聖霊院奥殿・絵堂・経堂が再建、その他の建物も次々に再興され現在ではほぼ旧観に復しています。さらに、戦後間もなく太子創建の寺であることから天台宗から独立し、和宗を創立。四天王寺はその総本山として、仏法興隆と太子精神の高揚を本願とする寺として再生いたしました。また、四箇院事業も、学校法人四天王寺学園を経営し、国際的な

視野のなかで仏教教育を実施し、社会福祉法人四天王寺福祉事業団を中心に悲田・施薬・療病の各事業を継承発展させています。

御法話：「大悲息むことなし」 瀧藤尊教第105世官長



前官長：瀧藤尊教

大正11年(1922)年生まれ。昭和17年(1942)、東京帝国大学印度哲学・梵文学科に入学。2年在学中、学徒出陣にて応召入隊。終戦後、京都大学仏教学部に転入学。同23年(1948)、同大学卒業と同時に比叡山大仙院住職。同26年(1951)、四天王寺学園で教鞭を執る。同52年～63年(1977～1988)、四天王寺中・高校長。同63年、文部大臣教育賞受賞。平成2～平成6年(1990～1994)和宗総本山四天王寺第百五世官長、四天王寺国際仏教大学学長を兼任、以後、相談役を務める。

隋の国情を見て出した使い

はい、どうも皆さん本日はよくお参り下さりまして有難うございました。

司会者さんが十七条全部言うてくれはりましたんで、憲法そのものについては私のほうからは、全体的に流れておる精神的な根拠についてご解説をしたいと思います。今日、原題は、『大悲病むこと無し』という題名をつけておるわけですが、これはですね、聖徳太子の著されましたお経の中に書かれておる言葉をそのまま頂戴したわけで、ほんとにすごいですね、聖徳太子という方は。1400年も昔にですね、日本がまだ精神的な高い境地になかった時に、次々と十七条憲法を輩出し、あるいは折衝に当たられた未曾有の聖者であられると思うんですね。世界のいわゆる普遍的帝王といわれておられて、ほんとに指折り数えるほどの人数しかいないのですが、その一人にお入りになっておられる、まあ世界的な大聖者であり、政治家であられる。第一ですね、あの当時、中国は、世界第一等の勢力で、その隋の国に対して、まだ誰にも知られていなかったわが大和の国・日本の国から、対等の外交を展開されたんですね。だから、日出ずるところの天子、日没するところの天子。確かに太陽が

出ずるは東でありまして、没するは西でありますから、その通りですね。地図で見たらその通りになるわけですから、怒りようがないんですね。まして” *つつがなきや” 「あなたお元気ですか？」なんてね、世界第一等の天子に堂々とですね。小国の日本から遣いを出されたのですから、隋のいわゆる煬帝という大王が烈火のごとく怒るんです。それが又賢いんですね。下手に怒って日本に攻めたら、その時の状況がちょうど長年苦勞している高句麗遠征の兵隊を集めて今から攻めようかと準備している時に、大和の国からその遣いを出すんですね。ですから、攻めるに攻めれないんですわ。とてもその日本までかまわってられんいう時ですから、副将が、「ちょっと待って。今送らんとってくれ。今送られたら大変です」と言います。その前に高句麗に遠征して負けてるんですね。疫病が流行って、又負けたら、隋の国の存在価値がないわけですね。だから、一生懸命止める。「それもそうじゃなあ」というわけで、腹の立つのを我慢して日本からの遣いに会うんですね。聖徳太子というお方はそういう適切な時期を狙ったのです。隋の国情を見定めて、攻めてこれんような時を狙って遣いを出す。しかもその言葉がいささかも卑下しないで、堂々と対等の文章で出されるんですね。今の日本の外交は心配ですねえ。へこへこしてますなあ。

遣隋使を圧倒した四天王寺伽藍

あれ情けない。かと言うて私はようしませんけれども、そりゃああの当時の最新の精神的な高さちゅうものはとても立派ですね、そしてとうとう遣いがですね。やって来たら、出迎えがこれがすごいんですね。遣いが瀬戸内海を通過して大阪湾に入って、もう大阪に到着する直前、そして難波津に上陸する前に、満艦飾を施した船をダーッと三十数隻出して、歓迎するんですね。相手はびっくりするんですね。そして四天王寺の西門の前から北上して難波津に上陸するんですけども、そう初めて日本の国土を見た時にですね、この四天王寺の境内が縦長でしょ、普通寺院は、四角になっとるんですね、ところが聖徳太子は、その日本の偉大さを示す為に、あえて南北に長い構想をされるんですね。だから南大門がある。仁王門がある、そして入ってきたらですね、その五重塔が高々とそびえてあって、さらにその前に本堂があって、その横に講堂があって、そしてそのいわゆる外側の堀があって、そして亀の池の向こうに、塔があって食堂があって、南から北に向かってずっと長いんですわ。だから、西の方から東を見て、ここから東を見て入ってきたら、びっくりするようなわけでしょうね。「これは、立派な国だなあ」第一印象が大事なんです。そういうような素晴らしい構想のもとに四天王寺をお建てになってる。だから外交の一つの拠点でもあったわけなんですわ。まあ、これは、一時的なものじゃないです。まだ色々意味があると。聖徳太子は一つしよう思うたら四つくらい考えられる人なんですわ。まあ、ほんとに偉い人ですね。でまあその聖徳太子が 604 年、ちょうど 1400 年前のこの日に十七条

憲法を作られた。会合で十七条全部読んでくださる会って、なかなかないですねえ。

無数の傘が宝石をちりばめた天蓋に輝く心の光

さて、私がいわんとしている大悲病むことなしに入りたいたいのですが、桜が今まさに満開ですね。もうそろそろサツキが咲き出しているんですがね。まあほんとに花が競い合ってるような美しい風景です。この花の咲いてる時、いつも頭に強烈に印象付けられるのはね、天華燦燦という言葉です。ええ言葉です。天華燦燦というのは、この桜みたいに自然に与えられて天から授けられた花が満開で、美しくその美を發揮している状態。太陽に輝いておる状態を天華燦燦というんですがね。これが私は、人生の妙なるものだと思います。実は聖徳太子がお作りになった本は、法華経とか勝鬘経とか維摩経があるんですね。特に勝鬘経は女性の方が、維摩経は男性の方が、法華経というのは全体ともに、人間として守る道を説かれた立派な三部作なんですわ、その維摩経の中に出てくるのが大悲やむことなし。どういうことかといいますと、まずこれはですね、物語から始まるんですね。

お経というのは、堅苦しいもんじゃないんです。必ずね、芝居みたいに舞台背景があるんです。お芝居で舞台がまわるでしょう。そしたら、ハッと美しい背景が展開されますよね。と同じように、お経のはじめには、必ず舞台が示されるんです。で、どんな舞台かといいますと、アンナジゲンというところにお釈迦様がおられまして、その前にダーッと 8000 人のお弟子方々が教えを聞こうと固唾を飲んで待ってるわけです。そういう光景なんです。そうすると、そこへですね、500 人の部下を引き連れた長者、侯爵、金持ち、商売人、紳士がおりましてね、これが教えを受けようというので 500 人の自分の部下を引き連れてやってくるわけですね。頭に思い浮かべて下さい、状況をね。まあその連中が全員日傘をさしてるんです。日傘といっても、ちやちなもんじゃないですよ。500 円や 1000 円で売ってるようなものじゃない。みんな傘の中に無数の宝石がちりばめてあるんです。それはすごいもんです。それが太陽の光に当たってキラキラ輝いとる。500 人が整然と列を作って、お釈迦様の元にやってくるんですね。目に浮かびますね。8000 人が座っておる、そこへ 500 人の金持ちの連中が、皆侯爵、長者に従って登場してくるという場面。そしてやってきますと、まず、長者がお釈迦様の周りを三度回らして、そしてお布施の代わりに自分のホウガイを捧げるわけです。そして次の人も三度回って捧げる。そうして 500 人が全部お釈迦様に持ってきた宝石だらけの傘を献上するわけです。お釈迦様は、その 500 本の傘をあっという間にウォーッと大きな天蓋みたいな形にしはったんですね。つまりそれが皆さんがおる上に、ぱっと展開するわけです。それはきれいですよ。一つ貰っても何万何十万円する宝石が。もうピカピカ光っとるんですね。その下に皆さんが座って、お釈迦様のお話を聞くわけですね。そこですごい文章が出てくるんですね。何が一番大事かとい

ったら、世の中のありとあらゆるものを輝かすのが心だと、とにかく世の中、人のおるところは必ず光が及ぶようにとかいてある。

SOMETHING GREAT な神仏の輝き

ところで、金子みすゞという女流作家(大正時代の人であります)、この人の詩は、素晴らしいですね、どれをみても。

その中に鉢の話が出てくるんです。(鉢はお花の中に)花の中に飛んできとるわけですね。(花は塀の中に)(土塀は町の中に)(町は日本の中に)日本の中に一つの町があるわけですね。(日本は世界の中に)世界の中に日本があるわけですね。(世界は神の中に)と書いてあるんですね。(そしてそして)と書いてある。(神様は鉢の中に)と書いてある。つまりそういう大きな大世界を傍観しているかと思ったら、ちっちゃな鉢の中にも住んでおられるという、つまり小は鉢の中に、大は世界の中に光を及ぼしておられるのが、これは神仏といわれるものです。

最近はずね、科学者も、神さんや仏さんという言葉をつこうたら、権威にかかわると思わはるんですね、だから、科学者は英語で something great っちゅうんです。たいがい、言うてますよ、科学者は。これは something great の力であるって言うてはります。何か知らんけれども偉大な力がある。世界の最も科学者でありましたアインシュタインさん、この人はね、大正 11 年にね、日本にやってきてるんですね。そして伊勢神宮へお参りして帰るにあたって日本に文章を残してかえってるんですね。それは今国会図書館に保存してある。嘘の話じゃない。ほんまの話です。日本の国の未来、これは伊勢神宮にお参りして、日本国家の尊さを身にしみて感じたんですね。そこで帰るにあたって作ったのが、有名な彼の日本に残していった文章なんです、(世界は今後益々争い、戦いに従事するであろう。)戦争ですね。たしかに第一次、第二次世界大戦がありました。日本もそれに巻き込まれましたが。そしてもう人類がへとへとになってですね。疲れ果てた時に、これを救済するのが、この日本の国だというんですね。世界の文化は、アジアに始まり、そのアジアの最高峰である日本こそは、世界の救世者となるであろう。私は神に感謝する。日本という国を作ってくれたことを。と書いてあるんですね。これは嬉しいですね。世界の科学者がですね。世界の今後の本当の平和の推進者になるのは日本だ。この日本があるから世界は救われるから私は神に感謝する、というそいう喜びを、そして希望を託して日本の国を去ってるわけなんですね。

日本の国家理念は聖徳太子の教えから

まあ今見ましても、これいつ終わるんやろと、次から次とね、ああいう恐ろしいテロが流行しだしてます。どこ見ても安全などはないような気がするんですね。ええかげん戦争のない国が欲しいと皆がこう願わずにはおれん、こういう時にこそ、日本の国の真価が発揮されな

やいけないわけなんですね。まあ今のところ自衛隊がうまいことやってくれてはりますから全くテロを受けずに、中には喜んで嬉しそうな顔してますね。テレビ見てましても違いますね。なんか日本の援助は気分がいいんでしょかね？むこうの人も。しかもね、昭和の 61 年には大統領を辞めて日本にやってきた時に、アメリカの大統領のレーガンさんが、東京と大阪で、財界人とか政治家の人集めて講演しているんです。それが翌日の新聞に出た、それを私も読んだんですけどね。一生懸命切り抜いて持ってましたけど、まあ失いましたけどね。何書いていたかということ、レーガンさんがえらい感謝してるんです。その自分バブルもはじけそうですけど、まだある時分ですね。まあ日本の国は有難く、あっちこっちのアジアその他の国に資金をいわゆる拠出していただいて大変な恩恵を受けると感謝しているわけですね。日本はしかしまさに水泡といえど、黄金の時代だと。ところが一つ注文があると。日本は黄金の時代だけれども、残念なことにこの日本の国には、指導方針といえますか、国家理念(どこの国でも黄金の時代には輝かしい夢をしたてるんだけれども)残念ながらそれが無いから、これはお考え願いたいというんですね。でも、あるんですよ、日本は。聖徳太子によって出られました教えが輝いとる。ただ、それを実際に各人が自覚していないだけであることはある。だからそれをまあ、大いに理解してもらうことが日本にとっても重大なキの問題であったんですけども…。まあ今日は、聖徳太子の十七条憲法の日を制定されてからちょうど 1400 年目の歴史的にも最も意味のあるとき、司会者さんが全部読んでいただいた。まあそれで皆さんのおつむにも残ってるわけで、あれ一つ味わっても大変な内容があるんですね。私、この前に朝 10 時から 11 時半まで 1 時間半 2 階でですね、ある一部の団体に、お子さんもいはりましたが、十七条憲法の話せえゆわれて、なんとその最初の和を以って尊しと為すの、「和」とという字だけで、1 時間半話してしもうたんですよ。ただ、まあそれを十七条みな読んでくれはったから、ありがたいと思ってますけれど……。とにかく十七条憲法は素晴らしい理念であると思います。

又ね、昭和 61 年だったかな？英国のチャールズ皇太子さんが日本に来られました。そして国会で演説してるんですね。それが翌日の新聞に出た。私は新聞でしか知らんですけどね。見ましたら、「今後日本の国があらゆる世界の先導的役割を果たされるでありましょう」と書いてある。なんだろうと思ったらですね。つまり経済・文化・宗教などにおいて世界の先導的役割を果たされるでありましょうと書いてあるんですね。日本の国というものを高く評価してくれている。しかもですね、敗戦後もう日本がガタガタになっている今日、そういう時代にもかかわらず、そのように認識し、理解をしてくれておる。私はこれを読んでね。これは頑張らないかなあ。これも切り抜いて持ってましたが、どこへ置いたやら分かりません。(笑)ともかく、まあほんとにですね、各国のリーダーは日本の国というものに期待しているわけが、

いつかね輝きはじめるでありましようけれども、まあ今は一番情けないですねえ。日本ほど安全な国はないと思っ
ていましたが、それも危ない。

やむにやまれぬ心でつくす善こそ最善

そして最後に皆さんに一つだけほんとお浄土さんに向かい、そしてこれを身に付けるための聖徳太子様の引用されたポイントちゅうのがね。善佛はこの世の中の最善である。この善はどんなものかという、報善と習善というおのがあります。報善というのは何かという、様々な努力をして立派な人格を作ろうと、我々僧侶でいいますと、修行をして、人格を作って、何にもめげない信念持ち主になろう。そして正しい真実を会得する人物、悟りを開こうと思って修行するわけですね。なかなかだめですけどね。もう80年たちまして死にそうですけれども。何もまだつかめていませんが。そこが習善というのはね、そんな「あれして、それして」と行をせんでもええということで、どうしたらいいかという、つまり人さんのために、己を忘れる時、やむにやまれぬ心でつくすこと、これがね、善の中の最たるものというんですね。

習善と報善・羊を連れた仙人の話

で、一つの例としましてですね。ある仙人がですね。仙人は寅を連れてる人と羊を連れてる人とかいろんな部下をつれて歩いている、千日山で行をしますから、仙人は神通力を持っていますね。一人の仙人は羊を部下にしとった。そしてね、ある時何か品物を買おうと思って町へ出たら、赤ちゃんが泣いてるんですね。「どうしてん？どうしてん？」と様子を見にいったら、お母さんが仙人に私はお金が無いから物が買えない。だからお乳が出ないので、赤ちゃんがおななすかして泣いてるんですが。それはかわいそうやないか。ちょうど羊のお乳飲ましてやろう。ということで羊のお乳を飲ませてやる。おいしそうにチューチュー吸うてね。寝てしまった。「ほれ見てみい、嬉しそうに飲んで寝たやないか、それじゃあ、わしはもう帰るぞ」と言うて山へ帰る。翌朝さあ修行しようと思って、皆友達も競争で仙人の行をしているんです。毎年1回神様のジャッジがあるから、それに向けて行をしている。「わしは昨日さぼったから、今日はやろう」と思ったところが、昨日の赤ちゃんの声が耳についてくるんです。(ああ、赤ちゃんがお腹をすかせて泣いてるな。)と思うと、じっとしてられない。またのこのこと羊を連れて降りてきた。「ああ、よしよし」ということで飲んで帰る。毎朝、修行をしよう思うたら気になるんですね。とうとう半年乳飲ませに通ったというんですね。そしたらある時もう羊を連れていったけれども、お母さんがニコニコしとる。どないしたんじゃ言うたら、「いや、お陰様で私も職を得まして、お給料も貰ったからおいしいもん買って食べて、子供にも乳飲ましたりしましたから、もう心配ないです」ということで「では、わしやあ、こんぞ」いうわけでそれから後必死で勉強するんですけども、他の友達みたいに半年の開きがあるわけです。

(ああ今年もうラストでええ。来年頑張るわ)思うて1年経ってジャッジ受けたら、なーんとべべだと思ったのが神格を与えられた。一等です。一等！。なぜか？すなわち己を忘れてひたすらこの人の為につくそうという偉い心でもって行った善を習善という。だから苦労に苦労を重ねるよりも、己を忘れてやむにやまれぬ心で人さんに尽くすのが、これが最高の善、習善というんですね。ちょっと書きますが、報善、報をもって第一とする報善というのは報いを求める。これは習善に比べて落ちる。こっちは報いじゃない。しゃあない。やむにやまれぬ心で人さんに尽くす、これが最たる善であると、聖徳太子は今言うたはります。本日は、時間の関係で、ここまでにしましよう。習善こそ善の善たるものである。難しい行はいらない。もうやむにやまれぬ心で人さんに尽くす。これがね、習善であり、善の最たるものであるってことを、土産にお持ち帰り願えば幸せだと思います。終わります。

(テープおこし：塾生 林紀公子さん)

お知らせ

御法話を更にお聞きになりたい方は、下記の上記の講座は参加自由、聴講無料です。開催日当日の30分前より受付いたします。受講お申し込みの際、氏名・住所などの記帳をお願いいたします。参加者には有料拝観施設の割引もあります。

聖徳太子・十七條憲法制定1400年記念連続法話

平成16年(2004)4月11日 開講【入場無料】

会 場：四天王寺本坊 五智光院 または 太子殿

午後2時～午後3時

諸般の事情により、止むを得ず会場の変更及び休講になる場合がございます。事前のお知らせに努めますが、予めご了承下さい。お問合せは、四天王寺 内司室 TEL06-6771-0066(代表)までお願いいたします。

戦後、めざましい経済的復興・繁栄は享受したものの、約60年におよぶ民主主義の渦中であって、日本人の宗教観・宗教教育は希薄化し、思い遣りに富んでいた日本人の美しき心に、かげりが生じたとも思える事件・事故が多発しております。無

宗教でも道徳心を涵養できるとする驕りがまねいた帰結でもありましよう。このような時代だからこそ、宗教心、とりわけ仏教精神を拠り所とした暮らしや教育を考えなければなりません。そのためにも、十七條憲法を現代に生かすことが強く求められましよう。

古来の神道と仏教という異なる思想を対立させるのではなく、融合させた平和思想、また四天王寺の四箇院(敬田院、悲田院、施薬院、療病院)に具現化した福祉思想、その第一条に「和」を掲げて、人の道を説いた十七條憲法は、律令国家を目指した大化の改新(難波宮遷都)の礎となり、千四百年の時を経て風化せず、今もなお日本人の心の中に生きる文化遺産なのです。

開講挨拶 四天王寺管長 塚原亮應

2004年(平成16年)

4月11日 五智光院	18日 五智光院
5月 9日 太子殿	16日 五智光院
6月13日 五智光院	20日 五智光院
7月11日 五智光院	18日 五智光院
8月 8日 五智光院	15日 五智光院
9月12日 五智光院	19日 太子殿
10月10日 五智光院	17日 五智光院
11月14日 五智光院	21日 五智光院
12月12日 五智光院	19日 五智光院

2005年(平成17年)

1月 9日 五智光院	16日 五智光院
2月13日 五智光院	20日 五智光院
3月13日 五智光院	

やまねない思いで行う善が「習善」。上下の隔たりなく、それどころか上下合間って国を治めようとされた聖徳太子様の建立された四天王寺の官長を勤められただけあり、いくら知り合いからの依頼だといわれても、ライオンズクラブならともかく、塾塾という名もない庶民の会であっても、話しが聞きたいのならと、元官長様も羊を連れた仙人のごとく、「習善」の思いにて、今回御法話を頂戴できることになった、これまた有り難い。

四天王寺には何度も足を踏み入れたが、官長様がこの広い境内のどこにいらっしゃるのか、ご尊顔もお姿も拝んだことがない。参加してくれた友人が、法話という固苦しさがない官長さんのお話を拝聴していると、心が和んでなんだか涙がでるほど感動したと話してくれた。四天王寺の元官長とは恐れ多いと肩肘張っているのはこちらばかりで、そのお話しぶりには垣根がなく、気負いがなく、八十数歳の年輪を重ねた瀧藤元官長は実に和やかな笑顔で寛大に迎えてくださる。その穏やかさに快く包まれていると、まるで春の陽ざしに咲く桜のように心地よい。

御法話が終わった後に、旭堂小南陵師匠登場。



覗きからくりの解説と、天王寺詣りで物売りが売っていた「亀山のちょんべはん」とは、竹細工でその上の人がちょこと乗っていて、指ではじくと竹がばねになってジャンプするという子供の遊び人形だと披露いただく。



続いて、立役者の塾生の村上無芳さん登場。

一言ということで、四天王寺蕪を門前で長く商っていたご自身の家系の紹介から始まり、天王寺蕪は別名「浮き蕪」といわれ成育すると土から浮き出たようになると写真パネルを掲げ、更に、この白いところは茎ですか、根ですかの質問。実は正解は茎、その先の細いヒゲみたいなのが根の部分とか、更に、最古の仏教寺院四天王寺に御参りにこられた帰りに持ち帰ったのも四天王寺蕪で、これを信州に持ち帰ると種は同じでも、気候が異なるので葉が伸びて野沢菜になったと八十センチほどに伸びた実物大写真をこれまた広げて「へー」野沢菜と四天王寺蕪が同じだったのにも驚いたが、野沢菜の葉が漬け込む前はこんなに大きいのかと驚いた。

その間に、お茶を飲みたい方は後ろのテーブルに湯飲みが並び10分間のティータイム。

休憩時間にござんくださいとのことで、旭堂小二三・南陽による「覗きからくり」の拍子を打ちながらの物語が展開する。



一息ついたところで、後半のトップは、落語ワークショップ。林家和女さん(林家小染夫人・桂あやめさんの実姉)が三味線を、笑福亭三喬さんが解説を、を、生喬さんが太鼓を、喬若さんが笛をとということで舞台がガラリと変わる。



マイクは声しか拾わない。座敷一杯に邦楽の音色が響く。思うに和楽器の音色は、ビルや洋館で聞くのではなく、やはり木造建築の中で聞くのが一番響きがいい。落語を語る場所が高くなっている所が”高座” 三味線や太鼓・笛は下座と呼ばれ、いつもは舞台の袖でその活躍の様子を垣間見ることができない。そこで、今回はその高座

を支える落語の楽屋話に耳をかたむけようということになった。まずは寄席が始まる三十分前には、呼び込みの太鼓、先ずはトントンと戸をたたき、ガラガラと太鼓の周りをばちでなでるのは、鍵をあける音、あとはどん

どんどんと来いとお客様を寄せ集める。そして5分前がまもなく開演の合図のベルの音代わり。そして、どの寄席でも、前座で若手のお囃子は「石段」、新人が医石段を駆け上がるようにという意味で演奏されるとのこと。で、桂文枝師匠や文珍さんなどの出囃子が披露され、イエローサブマリン



まで飛び出し、即興で、本日誕生日の人ということで、塾生の原季美子さんが両手を挙げた。では、4月の誕生日の方に送りますと、ハッピーバースデーの出囃子も、更に、出囃子リクエストということで、次々と手が挙がり、締め

めに塾生の井村さんが、上方落語の四天王の一人、故笑福亭松鶴師匠の出囃子、銅鑼も入ってなかなか豪快な出囃子を楽しんだ後は、三喬さんが高座に座って、太鼓の効果音は池田の猪買のシーンで雪が降っているという寒々とした雪の音とか、船頭さんが舟を出す音や、井戸からお菊の幽霊登場の音など、落語の一節を語りながら下座でどのように演奏をしているのかを総ざらえ。生で落語を聴く機会が少ない人、いや落語ファンでも下座の様子までは見る機会がない。参加者は興味津々に聞き入り、見入っていた。



井村さんの出囃子、銅鑼も入ってなかなか豪快な出囃子を楽しんだ後は、三喬さんが高座に座って、太鼓の効果音は池田の猪買のシーンで雪が降っているという寒々とした雪の音とか、船頭さんが舟を出す音や、井戸からお菊の幽霊登場の音など、落語の一節を語りながら下座でどのように演奏をして



ているのかを総ざらえ。生で落語を聴く機会が少ない人、いや落語ファンでも下座の様子までは見る機会がない。参加者は興味津々に聞き入り、見入っていた。

そして最後は、笑福亭松喬さんの天王寺詣りを披露。一昔前では、四代目や五代目の松鶴以外は、あんまり演



じてはいけないというような、タブーというか、不文律というか、そういう雰囲気があったことがあったそう。故・六代目笑福亭松鶴氏も、五代目さんが息を引き取る間に、枕元でこのネタを語られているのを聞かれたらしく、やはり別格のネタという感じがぬぐいされないとか、初演は、桂文枝氏の方が早かったらしいが、やはり六代目にとっては、五代目の遺言、覚えてほしい、演じてほしいネタとして、特別な意味があったものと思われる。六代目亡き今日、様々な噺家さんが演じられているとはいうものの、やはり笑福亭代々の十八番。

さらに、この落語のネタの死んだ愛犬、クロへの思いは、今も昔も飼い犬を家族のように可愛がる愛犬家の物語でもある。

愛犬を亡くした主人公が、友達と犬の供養に春のお彼岸に四天王寺に御参りにやってくる。石居の鳥居をくぐって亀の池まで、歩く途中の様子を覗きからくりや出店の売り声も賑やかに描かれおり、そこは上方落語の聞かせどころ先ほど落語ワークショップで勉強した鳴り物が大活躍。効果音など、裏方のがんばりで、四天王寺の賑わいに花を添える。勿論、落語の中の四天王寺の建物の配置もお彼岸の賑わいも、今とほとんど変わらない。落語を聴き終えた後に、松喬さんを先頭に二人が歩いたルートを辿った。

何故、四天王寺が庶民の寺として今も多くの人々が集う寺になっているのか。そこには、聖徳太子様が十七条憲法に掲げたように広く庶民、貧しい人の暮らしをも案じ、様々に人々に施した慈悲なる思いが生きているためだと気がついた。その思いが集う場所が、この四天王寺なのだと改めてその大きさと人々を自然にひきつけている。

仏教はここから、広く日本の隅々にまで広がっていった。

十七条憲法から、御法話、のぞきからくりなどの大道芸、「天王寺詣り」を楽しむ為の落語ワークショップに、石の鳥居までの掲題案内。この企画は、東京では組めない。聖徳太子様が活躍された四天王寺は、今もそのお心と共に大阪の地に遍く輝く慈悲の光を放っている。思い出にのこる、十七条憲法制定1400年記念日に、集えるご縁を頂いたことに改めて感謝したい。(原田彰子)

天王寺詣り(犬の引導鐘)概要

毎度おなじみ、おもしろい主人公が、これもおなじみの、物知りの人の家へやってくるというところから話は始まります。“あんた、珍しいもん見せたげまひよか。彼岸。うちの裏に穴が開いてまして、出たり入ったりしてまんねん。丈が七・八寸でねえ、キチキチちゅうて鳴いてまんねん。”“そら、イタチと違うか。”“そうでんねん。下駄で蹴ったろうと思うたら、藤助はんが入ってきて、これ彼岸やがな。”“そらイタチやがな。”“イタチが出たら、彼岸。ほんなら、ネズミが出たら、中日。ネコが出たら、けちにゃん(結願)で。”って、

大阪では、お彼岸になりますと、どういうご宗旨の方でも、四天王寺・天王寺さんへお参りする風習がありまして、経木という、塔婆に戒名書いて、水をかけたり、引導鐘をついたりするらしいです。つまり、彼岸中やさかいに、殺生はしたらいかんということやったんですな。“彼岸で、何だんねん?”“天王寺さんで、無縁の仏の供養をしなはんねん。引導鐘をつくつと、十万億土へ聞こえるというなあ。”“天王寺のやまこ坊主が。うちと、天王寺さんと、ほん近くでっせ。そやのに、ついぞ聞こえたことがない。それが、十万億土てな遠いところに聞こえる訳がない。”って、そらそやわ。十万億土いうたら、この世から極楽に至るまでの世界のことですもんな。この、“やまこ坊主”ちゅうのは、“やまこはる”の“やまこ”、つまり、はったりとか、見得とかいう意味ですなあ。“ご出家は、十万億土の道を教えなはんね。”“わたい、この前、心齋橋筋歩いてたんだ。すると、向こうから来たぼんさんが、もうし、八幡筋へはどない行たらよろしい。八幡筋の分からん坊主が、十万億土の分かりそうなはずがない。”って、これも尤もや。

てなこと言いながら、この主人公も、引導鐘についてやりたい仁が一人いるとのこと。主人公の家に長いこといた男で、かわいがってもととたけど、買ったての鯛取って、憎たらしなった...。って、犬やがな。表へ出なよと言うても、畜生のこと、表へ出た拍子に、歩いてきたおっさんが、棒で犬の頭をどついた。バァンと殴ったら、犬もクワ〜と言うて、死んでしもた。これがこの世の別れ。無下性、無礙性・無碍性(むげっしょう)には、どつけんもんですわなあ。つまり、無下に、むやみやたらにという意味と、無礙・無碍に、気持ちのおもむくまま、手加減しないで、思い切りという意味、どちらもあるんですけど、殴ってはいけないということですよなあ。主人公も、思い出したのか、涙ぐみながらも、“あれ、犬導鐘いうて、ありがたいん。”というシャレ。でも、功德になんねやさかいにと、ついてやろうということになり、二十銭でも紙に包んで持って行たらエエ。“ちょっと取り替えてやりなはったら、どんなもんでおます。”って、どっちが貸すねや分からんがな。主人公も、直接に“貸して”とは言いにくいさかいにねえ。“お前には、ちょちょこと貸しがあるで。”“そんなもん、どっちでもよろしい。”

“しかし、これは白紙では持って行けん。戒名を書かないかん。”“ちょっと書いとおくなはれ。犬のことで、ワンワン信士と。”“そんなアホな。”“俗名ククロと。死んだ日は、七月の二十四日。”“他には?”“何ぼ書いても同じ値ですか。ほんならついでに、うちのおとつあんのも。戒名が、れいがんきてい信士(靈巖貴鄭信士、おそらくこの字やと)、死んだ日忘れ。”“あら、たしか、節句やったか、月見やったか。”“団子食うた日。”しかし、同じ値やったら、何ぼでも書いてもらおうというのが、いかにも

関西人らしいですなあ。それで、団子というのは、月見団子のこと。旧暦でさかいに、八月十五日やね。ま、ここの日付は、演者によっても違いますけど。“もう一つ、ついでに、笑福亭松喬と。噺家だ。わたい、ひいきにしてまっさかいに、ちょっとついといてやろうと思うて。日はいっかにしときまひよ?”

主人公は、これを持って参ろうとしますが、一人では頼んない。明日の中日に参ると言うてる、この人と一



緒に行ってもらいたい。“明日参るやなんて、今晚のうちにゴロツと行ってしまおうかも知れまへんで。人間の命は、風前の灯、明日をも知れぬ見の終わりかな。明日をもどころやない、今を

も知れぬ見の終わりかな。明日あると 思う心の あだ桜 夜半に嵐の 吹かぬものは、ただ南無阿弥陀仏...。”って、法談やがな。“牛に引かれて、善光寺詣り。”“犬に引かれて、天王寺詣り。”ホンマやわ。“おさよ、羽織を出してんか。”“わたいのも、ついでに。ちょっとあんたのん、借って行こ思て。”“大きい方の銭入れをな。”“金ぎょう~さん入れてな。帰りは、精進あげ、おおけに、ごつつおはんで。”て、あつかましいな。

二人で外へ出ますと、くもり空。歩いているうちに、下寺町へ。“忙しい 下寺町の 坊主持ち、ちゅうのは、ここやなあ。”“あら、上坊主でんなあ。やっぱし、あれは二十坊主。”て、花札やがな。このギャグも、分からんようになりましたなあ。次は、大阪合邦ヶ辻。『摂州合邦辻』の歌舞伎芝居で有名ですね。西が新世界に通天閣、正面が動物園で、向こうが一心寺、向かいが安井の天神さん。『天神山』の舞台でもありますね。と言いながら、やってまいりましたのが、天王寺は石の鳥居。“うわあ、まあ。”という主人公の大きな声、びっくりしまんな。大和・吉野の唐金(からかね)の鳥居、芸州・安芸の宮島の楠(くす)の鳥居と合わせて、日本三鳥居の一つ。“高いところへ、ちりとり上げよった。”“あら額や。”“百日患うたら死ぬ。”“そら、核や。”“四字ずつ四つ、四四の十六書いておまん。”“何と書いたあるか、分かったあるかちゅうね?”“そら、分かったないわちゅうね。”て、おもしろいわ。“釈迦如来 転法輪処 当極楽土 東門中心じや。”“何にも分からんネコの糞じゃ”て、どっから、そんなこと思いつくねん。“弘法のささえ書きというな。”“どしよう汁に入れたら、うまいやっちゃ。”“そら、ごんぼのささがきや。”“真は、小野道風の自筆ともいうなあ。額という以上、箕(農器具の、あのザルみたいなやつですわ)の形にしてある。柱の根元を見てみなはれ。カエルが三匹彫ったあったが、時代がついて、なれて丸うになったある。上が箕で、下がカエル、上から下へ、みかえるちゅうねん。”“私がここで、ひっくり返る。”と言いながら、でんぐり返り。その拍子に、ポンポン石で頭打った主人公。石の真ん中に穴が開いているので、ここへ他の石でもって叩くと、ポンポンと音がする。そこへ耳を寄せると、あの世で身寄りのもんが言うてるのが聞こえるという。主人公もやってみますと、聞こえるわ、聞こえるわ。おばはんちゅう人が、口のうまい人で、あの世で閻魔はん取り込んで、資本金出させて、手広う商売したはる。“どうぞ景色(けいしょく)のエエところが



空いております。おでんのアツアツ、休んで

それから、納骨堂に西門。敷居が高いのは、境内が天竺をかたどってあるため。柱には、小さな車がついたある。“いっぺん、回したろ。さあ、やってごらんはない、回してごらんはない。大当たりはカステラが三本。”て、夜店の当てもんやがな。“こら、輪ぼう(転法輪でっしゃろ)。”“小便の出にくい病氣。”“そら、淋病。境内は、手洗いが無いので、水という字を崩して、車にしたある。これを三べん回したら、手を洗うたも同然や。”“わたい、さっきおいど(お尻)かいたんだ。何べん回しても、風がえたら(においだら)くさい。”て、そらそやわ。

それから、義経鎧掛け松、文殊堂、金堂に経堂。金堂の中には、淡太郎(淡路屋太郎兵衛)の木像。“へえ、こいつやなあ。よっさんとこの子取りよったん。ガタ口の極道。”違うがな。しかし、最近、あんまり子取りて、言えしまへんなあ。次が五重塔。またもや、“うわあ、まあ。”というアホ声。しかし、屋根が四つしかない。ようよう見ると、一番上に一回り小さいの。“ああ、あの蓋ともで。”て、重箱や。回廊に南門、西に見えるが、虎の門、太子堂、引導鐘。猫の門に、瓢箪の池。東に見えるが東門で、釘無堂に本坊に釈迦堂。そして、大釣鐘に足形の石に鏡の池に、伶人(れんじ)の舞の台。“この上では、もう前のように、舞い舞えまへんか?”て、いらんこと言わいでもエエねん。

“天王寺の蓮池で 亀が甲干す はぜ食べる 引導鐘ゴンとつきや ホホラのホイちゅうのは、どこです?”て、この人、子供やがな。大阪に古うからある童謡らしいですな。で、二人は亀の池へ。“手叩いたら、こっちへ来よるわ。”“ほんに。手叩いたら、こっち来るとは、よう仕込んだある。ここの亀は元仲居しとった。”て、そんなアホな。“何ぞ餌がもらえると思うとんねんなあ。”“そんなんやったら、ソラマメの炒ったん買ってきたらよかった。”“ソラマメみたいな硬いもん、噛むかいな。”“噛まんもんに、なんで亀ちゅうねん。”その通りやわ。ところで、この境内の説明のところ、今現在には、すでになくなってしまっているものや、移転している建物もあって、必ずしも、今の段階のものとは一致しているわけではなく、昔の天王寺さんの様子を表現されているようですね。と言いつつも、わたい、いっぺんもまだ行ったことおまへんねん…。

こない言うてますと、天王寺さんには二人しか歩いていんようですが、なかなかそやないん。彼岸中は、ぶっちゃん商人が店を出してますやら、寄進坊主が出てるやら。参詣人は、押し合い、へし合い。“お焼香~”というキッカケで、下座からは『禅の勤め(ぜんづと、ぜん)』の離子が入ります。お寺の境内では、よく使われておりますな。ここで、二人とは少し離れまして、演者は境内の様子を見せますな。見台(けんだい)の上で、小拍子(こびょうし)を使つての、亀山のちゃんべはん。竹でできた子供のおもちゃですな。また、小拍子を独楽(こま)の芯に見立てた、竹独楽屋。お寿司屋はんでは、押し・巻き・握り寿司。それぞれに細かい描写があつて、くしゃみをしながらの握り。『不如帰(ほととぎす)』の

覗きからくりや、サーカスの呼び込み。巡礼のお乞食さんが子供を置いて、ノミをつぶしながら、御詠歌上げる様子や、小さい木魚持った、阿呆陀羅ぼんさんの阿呆陀羅經(あぼだらきょう)など今と変わらぬ賑やかな様子。

さいぜんの二人、ようようのことで、引導鐘をつくことに。外には、ぎょうさん市松(いちま、市松人形)や、着物が吊ったある。“あそこに、クロのすり鉢吊る。”て、そんなん見かけたら、ビックリするわ。中へ入っても、“おい、ぼんさん。”ちえなこと言いながら、紙に包んである二十銭をさし出して、頼みます。つく前には、死なはった人の名前と、命日を読み上げる。では、笑福亭松喬もという、「あの人、死なはりましたか。私好きでしたけどなあ」というと「いえ。まだ達者で働いてます」と、ここで爆笑。と、そのうちに、まず一つ目をぼんさんがつく。鐘の音の最後のところ、“ウ~”ちゅうのが、クロの鳴き声に似ていると言われて、ぼんさんがつく二回目をよく聞いていると、ほんにクロの鳴き声。“ここに、来てるんやったら、言わんかいな。たとえ、鰻のしゃっぽんでも、買ってきてやんのに。”しゃっぽんて、頭、はんすけのことですわ。三回目は、自分でつくつと、踊りながら焼香もして、阿呆陀羅經みたいなもん唱えながら、“クロ、一つエエ声で頼むで~。”“クワ~ン”“あ~あ、無下性にはどつけんもんや”お帰り。”て、そら向こうの茶店やがな。

参加者・一般：石田英治・大国章子・小川忠雄・加賀勝・金澤忠俊・木村剛・木村昭和・栗山修・児玉紀男・後藤稔・小林伊一・斉藤浩之・柴弘一・島崎浅一・清水みち代・下野英世・菅野裕出子・高平和子・高安健博・瀧本慎・多田峰子・徳山博子・田中豊稔・田村定彦・豊田和子・仲実・生木栄・西尾昭子・西野晃・西田元浄・西山すみ子・野崎英信・秦陽三・馬場勉・藤田文・日笠治美・藤田吉之・福山元之・正木謙次・松崎吉之・松村安雄・万谷千代子・三井良治・安田千・山内紘子・祐成あつ子・吉田信栄・吉田奈可・吉原芳文・吉本三知子・吉矢久人 他 65 名

塾生：秋山建人・石見哲子・岡田保朗・鍛冶睦子・北原祥三・北村千代江・塩本妙子・杉山英三・原季美子・原米子・原田彰子・林紀公子・堀内紀江・広里重子・平野康子・藤戸稔也・山本ゆき・森川千世子・森川道子

運営スタッフ：秋山建人・小川忠雄・鍛冶睦子・北原祥三・北村千代江・杉山英三・原田彰子・林紀公子・堀内紀江・広里重子・平野康子・山本ゆき・森川千世子

終了後、近くのうどん屋さんで打ち上げ

